



訪問看護の醍醐味がここに！

平野和恵 東京都・がん研有明病院
緩和ケアセンター医療連携部

本

誌2014年11月号の特集「これが私の訪問看護だ。」は、まず7人の訪問看護師により、実践に基づく経験知が個性豊かに語られている(巻頭の「マグネットステーション」の原田典子氏の実践も、このなかに含まれると思って拝読した)。

折しも今号の発刊は、第4回日本在宅看護学会学術集会の開催時期と重なっていた。著者のなかには、この学会の関係者やシンポジストだけでなく、ほかの研修会でもお名前を聞く方がいた。そのような著者たちの事実に基づく多岐にわたる現場論は、もし彼女たちの「現場」をライブで拝見することができれば、訪問看護師になりたい人が今より3倍は増えるのではないと思われるもので、看護学生になったように新鮮な学びとともに読み進められた。

なかでも阿部智子氏の記事(p.877)は、ステーション名「けせら」にも一致して人柄がにじみ出る文章だった。とくに879ページの「私には夢があります」の一文には、思わず心を打たれた。他人に夢を語る人間がどれだけいるだろうか？訪問看護を通じて、作為なく夢を語れる阿部氏の姿勢は、まさに看護師としてのロールモデルであると感動した。

さらに著者の1人である高砂裕子氏は、私のかつての上司でもある。当時、彼女の「現場」以外の姿を、私も含めほかのスタッフは、実はよく知らなかった。スケジュールボードを見て「今日、所長は出張なんだ、ふーん」という日も少なくなかった。

それが、今回の特集(p.880)を読んで、彼女の今までの20年、そしてこれからの訪問看護と地域に寄せる思いがわかり、私も彼女のように地域の役に立ちたいと思わずにいらなかった。

おそらく、ほかの著者も自分のスタッフに今回語られた内容を直接語る機会には、そうないと思われる。その背景において、今回の特集は次世代(のつもり)の私たちには本当にありがたい名作集であった。

今回の特集がさらに素晴らしいのは、上述の名作集に記された実践や言葉を川村佐和子先生が訪問看護師の「過去」「現在」そして「未来」に体系化されていることだ(p.884)。訪問看護は、訪問看護指示書による「医師の指示」を踏まえ、「看護師の経験と根拠に基づく看護」を展開し、利用者の生命力と輝きを引き出す。それを川村先生は、みずからの言葉ではなく実践を語った各著者の言動からまとめられている。それは、まさに「これが訪問看護だ。」と言えるものなのである。各著者の方々も、川村先生の執筆稿を読まれたとき、私と同じ思いをもたれたのではないか。この感動を、ぜひこれを読んでいる読者の皆さんにも共有していただけると嬉しいかぎりである。

そして、今号の特集の最後には、緒方泰子先生の「すばらしい訪問看護の実践をどうやって第三者に伝えるか？」が掲載されている(p.891)。訪問看護は、原則単独で個人の居宅で提供する性質上、病院看護に比べ、複数の看護師や他職種がそのケアの効果を直接観察することが難しい。つまり、質を数量化することが困難な背景があり、このタイトルのごとく、それをいかに克服できるかということが課題である。解決するには多職種・異業種の方々の力がまさに必要だとますます実感している。



今号は形態こそ「雑誌」であるが、充実度は書籍に相当する内容であると太鼓判を押したい。私が今号を読んでいたきたい読者層は、「うんうん、わかる、わかる」と共感しながら一気読みするであろう訪問看護師仲間、地域で訪問看護師と連携する多職種の方々、在宅看護論で訪問看護に興味を持たれた看護学生や看護教員の方々、そして、最も読んでいただきたいのは、訪問看護師の実践を生で見たことのない病院看護のプロフェッショナルの方々である。ぜひ訪問看護・在宅ケアの醍醐味を本特集から味わっていただければと思う。

2025年まであと10年。訪問看護は、「地域包括ケア」「多職種連携」「高齢多死社会」のキーワードである。今号の特集に負けないよう、私たち訪問看護師が率先して、さまざまな場の看護師や多職種と相互理解ができるよう歩みよることが、利用者(患者)・家族を中心とした質の高いチームケアには不可欠である。今から10年後の2025年、今号が「古典」となっているか、「予言書」になっているのか、結果は私たちに委ねられている。